

恋人たちのポライトネス

パフォーマンスとしてのほめ／ほめ返答とイン／ポライトネスの評価

大塚 生子

工学部 総合人間学系教室
(2017年5月31日受理)

Politeness in a Romantic Situation
Compliments and Compliment Responses as Performance and Evaluation of Im/
Politeness

by

Seiko OTSUKA

Department of Human Sciences,
Faculty of Engineering
(Manuscripts received May 31, 2017)

Abstract

This study investigates how a man and a woman in a romantic relationship present themselves through compliments and compliment responses from the perspective of “Performance” (Goffman, 1959), which considers social behaviour as presentation of self. Most of the previous studies have presupposed that a compliment is a speech act that conveys a complimenter’s positive evaluation without questioning the complimentee’s actual evaluation of the compliment. Introducing discursive approaches to im/politeness also reveals why each complimenting speech act is evaluated as im/politeness according to social factors. This analysis empirically shows that a specific relationship between participants and social factors such as social norms affects their self-presentation and evaluation of im/politeness of the compliments.

キーワード ; ほめ／ほめ返答, イン／ポライトネス, パフォーマンス, 談話分析, 談話的アプローチ

Keyword ; Compliments/Compliment Responses, Im/Politeness, Performance, Discourse Analysis, Discursive Approach

1. はじめに

以下の談話例 1, 2 は、かつて同一の社会集団に属していた 30 代前半の女性 F・男性 M の会話からの抜粋である。彼／女らは十年來の友人であるが、恋愛関係に発展してからは本談話例記録当時で 9 か月程度である。

《談話例 1》² 30 代前半女性 F・30 代前半男性 M

【F の運転する車内にて：M が F に仕事の愚痴をこぼしている(F と M は同種の職業に就いている)】

1M: ぼくはどうしてあげたらいいん

2 (1.0)

3F: なあ——

4 (3.0)

5F: まあなあ、多くを求めてんちゃうやっぱ

6M: 求めてへんよ

7F: んー、求めてへんけど、まあ—その子らにしてみた多くなんちゃう決して多くでは／／ないけど

8M: ふふ

9M: sss{吸気音}そうかあ——、あ——でもな—／／——

10F: ん——

11 (6.5)

12M: にしてもやで?

13F: んん?

14M: 問題はやで?

15F: おん

16M: 一番の問題は何かゆうとこかあ?

17F: なにい

18 (1.5)

19M: F にゃんがかわいいってことやん

20 (2.0)

21M: F にゃんがあ、かわいいってことがあ、一番の／／問題やで?

22F: はあ{ため息}

23M: なにため息

24 (2.0)

25M: F にゃん

26F: なにい

27M: 何のため息

28F: ふ——

29M: {笑い}

30M: 大問題やろ?

31F: 何がやねん

《談話例 2 》 同上ペア

【M の自宅にて：M がパソコンで仕事をしており、抜粋以前 1 分程度キーボードを操作する音のみが記録されている】

1M: ちょっと待って、ちょっと待ってな

2F: うんいいよ?

3 (1.0)

4M: かわいいよ?, 今日もゆうとくけど

5F: かわくないしそなんゆわんでいいよ

6 (1.0)

7M: なんで今日もそんなかawaiiん

8F: なんなんほんまそれ{呆れた調子}

9F: はっ／／は{笑い}

10M: ゆうてみちよっと

11 (1.0)

12M: 今日も—、なんでそんなかawaiiんかゆうてみ?

13 (2.0)

14M: ちょおゆうてみ?

15F: んな—間を埋めるために—、

16M: うん

17F: そうゆうことばかり、連発してくるんやめてもらっていいかな

18 (3.0)

19M: *／／***

20F: いいよ別にあの、好きなようにして?

21M: あそう

22F: お仕事どうぞ?

23 (1.0)

24M: 答えてくれる?

25F: あたしなんか遊ぶもんないかな—{自分のかばんの中を探す}

26 (2.0)

27M: 答えてくれる?

28F: 特にないなあ

29M: 質問—、答え／／てくれる?

30F: 何をよ—はは{笑い}

31M: はよ—、答えてくれる?

32 (7.5)

33F: しゃあないな、これ読んどこ

34 (5.0)

35M: 待ってるけど?, 僕

36F: んん?

37M: 質問

38F: 何?

39 (2.0)

40M: ***//**

41F: なんでやねん

42M: え？、なんでやねんとかある？

彼らを対象に継続的に行った会話記録²において、上記談話例にも見られるようにMはFに対し「かわいい」というほめを繰り返し、Fは常にそれに対し否定や非難の表明を行っている。なぜMからの「かわいい」という、少なくとも言語表現上は肯定的な評価であるほめを否定的に捉えるのかについてFにフォローアップ・インタビューを行ったところ、Mのほめを不快だと述べながら、①「Mは本心から『かわいい』と思ってほめているのではない」、②「Mに『かわいい』といわれても嬉しくないし、自分が『かわいい』とは思わない」と返答した。

ほめ／ほめ返答に関する研究ではこれまで、ほめ手とほめの受け手との評価が合致しているという前提のもと、言語・文化や男女、社会的地位の上下といった特定の固定的な社会的変数に基づくほめの頻度やほめ対象の傾向を求めようとする量的研究が多く行われてきた。また、現在に至るまでほとんどのほめ／ほめ返答研究において引用される以下のHolmes(1988)の定義に見られるように、ほめはBrown and Levinson(1987)のポジティブ・ポライトネスに該当する、人間関係を円滑に保つ機能を持つ発話行為と見なされてきた。

A compliment is speech act which explicitly or implicitly attributes credit to someone other than the speaker, usually the person addressed, for some 'good' (possession, characteristic, skill etc.) which is positively valued by the speaker and the hearer.

(Holmes, 1988: 446)

ほめ／ほめ返答は、謝罪・依頼・感謝などと並び、ポライトネスの分野ではかつてはさかんに研究対象とされてきたが、すでに飽和状態にあるのか近年では活発な議論が行われていない。しかし上述したように、従来のほめ研究はほめを特定の機能を持つ発話行為と見なして量的に扱うものがほとんどであり、当該のほめがある社会的文脈の中で「なぜ」行われたのか、ほめの受け手に「どのように」評価されているのか、また実際の人間関係の構築というディスコースにおいて「どのような」意味や効果を持つのかを未だ明らかにしていない。

Rees-Miller(2011)が、ほめの分析の際には誰が誰に対してほめを行うのか、どのようなタイプのほめなのか、

ほめが行われるのはどのようなコンテキストにおいてなのかを知る必要があると述べているように、ほめの実行やほめに対する評価³の基準は、相手との人間関係を含めたコンテキスト、ほめ対象、社会的規範等に影響を受ける。ほめを一概に「人間関係を円滑にする」ことを目的として用いられるもの、また実際にその機能を持つもの、と固定的に捉えるべきでないことは、前掲の談話例およびフォローアップ・インタビューからも明らかであろう。

筆者(2014)ではこのような観点に基づき、Fが「Mにかわいいとほめられることが不快である」と主張する理由のうち、①「Mは本心から『かわいい』と思ってほめているのではない」に着目し、イン／ポライトネスを談話を通して構築される聞き手の評価であると捉える構築主義的談話的アプローチ(constructivism, discursive approach)の立場から、ほめに対するほめの受け手の欺瞞性認知およびほめの受け手によるほめ手の意図の推論に基づく評価を、関連性理論の枠組みを用いて分析した。

他方②「Mに『かわいい』といわれても嬉しくないし、自分が『かわいい』とは思わない」に目を移すと、なぜほめられても嬉しくないのか(嬉しくないと主張するのか)、またなぜこれを否定的に評価するのか、そしてそのことによりどのような自己呈示を行なっているのか、という疑問が生じる。

本稿では、ほめ／ほめ返答における社会文化的規範と会話協力者らの「恋人」という人間関係を軸に、彼／彼女らの一連のほめにまつわる相互行為を、単なる発話行為の連続としてではなく人間関係構築の場と捉え、そこで行われている自己呈示とほめ行為に対するイン／ポライトネスの評価を、Goffman(1959)のパフォーマンス(performance)の観点から分析する。

2. ほめにまつわるパフォーマンス

2.1 Goffman(1959)のパフォーマンス

Goffman(1959)はパフォーマンス(performance)を「ある特定の機会にある特定の参加者がなんらかの仕方での参加者のだれかに影響を及ぼす挙動の一切」(18)と定義している。Goffmanによると、一般的に対面的相互行為の際、人は、相手に自分の利益になる印象を伝達するよう自分の挙動を操作する。まるで舞台の上の役者が演技(performance)をするように、相互行為の相手や状況によって、(非)言語表現や服装、態度等のふるまいを、その場において相手に持ってもらいたい自分の自己像に合わせて統制・表出しようとするのである。Goffman(1959)は例として、アメリカの女子大生がデートの相手になりそうな男子学生の前では自分の知性や技能を実際よりも低

く見せ、男性の優越を望む欲求に沿うよう振舞ってデートの相手に選ばれようとするなどを挙げている。受容者はこのような行為者の振る舞いを過去の経験から判断し、特定のグループや印象と結びつけて評価を行っている。

パフォーマンスにおいて、ある行為主体は、何か別の目的のための手段として相手の印象を意図的に操ろうと動いている場合もあれば、自分の演じる役割を自分自身のリアリティそのものだと信じ込んでいる場合もあるとされている。パフォーマンスの作為性については談話分析の際の客観的な判断は容易ではないが、筆者(2014)で明らかにしたように、ほめの受け手にとってほめの作為性、つまりMが本心からFを「かわいい」と思っているのか、あるいは何らかの別意図があり、Fを操作するためにほめているのかというFの判断は、そのほめを肯定的に評価するのか否定的に評価するのかに大きな影響を与える。前稿ではMのほめに対するFの推論過程を辿り、関連性理論の観点からMのほめを「欺瞞的」「作為性が高い」と判断するFの評価の妥当性を明らかにしたが、本稿ではほめによってMがどのようなパフォーマンスを行い自己呈示を行なっているのかを手掛かりに、ほめに対するFの評価を考えたい。

2.2 ほめ行為

ほめは上掲した Holmes(1984)の定義にも見られるように、ほめ手・受け手双方にとって肯定的に評価されるものと捉えられてきた。ほめに関する研究は国内外において広く行われてきたが、多くの研究が Holmes の定義のように話し手・聞き手の評価が合致していることを前提としており、ほめを人間関係を良好にする「社会的円滑剤」と見なしている(Wolfson, 1983; Maiz-Arevalo, 2012; Jaworski, 1995 等)。ほめはポライトネスの分野でもしばしば研究対象となり、従来のポライトネス理論の中で最も有力なものとされてきた Brown&Levinson(1987)では、ほめは相手の親密化・承認欲求を満たすものとして、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーのひとつとされている。これら従来の研究は、ほめを「話し手(ほめ手)の用いるストラテジー」と捉えており、聞き手(ほめの受け手)が実際にそれをどのように評価しているかについての詳細な検討はされていない。

イン/ポライトネス研究の分野では、2000年代ははじめ頃から、Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論に代表される合理主義的・トップダウン式の方法論への批判から、談話的アプローチ(constructionism-discursive approach)を用いて聞き手の評価を重視する研究が増えてきている。ほめについての分析も、実際にそれが起こ

った文脈の中に戻し、それが談話に及ぼす効果や受け手の評価を包括的に考慮する必要があるだろう。

パフォーマンスの観点から考えると、「ほめる」という行為は一般に、相手に対する高い評価を表明することによって自分が相手に好意を持ち、承認していることを示す、「相手にとって好ましい相互行為の相手」という印象を与えるものと見なされていると考えることができる。しかし一方で、例えば社会的地位が高い人から低い人に対するほめが起りやすいこと(Holmes, 1988)、男性よりも女性に対するほめが多く行われる傾向にあること(Wolfson, 1983)などからも分かるように、相手に対する評価を表明することが社会的に許されているとほめ手が見なしていることも同時に伝達する。またほめによって思いやりや評価を表明する必要があることは、場合によっては潜在的に相手との距離があるということ(Daikuhara, 1986)を示すことにもなる。

このように、ある特定のパフォーマンスには、行為者が伝達を意図した印象だけではなく(それがたとえかなりの程度で意図した通り正確に伝達されたとしても)、その行為自体の持つ潜在的な社会文化的意味も同時に伝達してしまう。また、筆者(2014)で明らかにしたように、ほめ手の意図とは関係なく、ほめの受け手はしばしば、それまでの相互行為において構築してきた前提知識やほめが導入される状況などを参照し、そのほめの作為性を推測する。そしてほめ/ほめ手に対するほめの受け手の評価は、彼/女がそのほめの作為性がどれほど高いと感じるか、また何のためにほめ手が作為的に印象操作をしようとしていると考えるかに影響を受ける。例えば、服を買いに行き試着したときに、服屋の店員にとってもよく似合うなどとおだてられても、我々はそれを容易に言葉通りには受け取らないし、夫が妻をほめた後で週末に育児を妻に任せて自分は友人と遊びに行きたいと言い出せば、妻は先ほどのほめを夫の本心ではなく自分を操作するために行ったものだと判断するだろう。筆者(2014)では、フォローアップ・インタビューにおいてMはほめの作為的意図を否定し、本心から言っていると主張していたが、Fは状況からMのほめには別意図(この場合はからかい)があると見なしてほめ行為およびMに対して否定的な評価を表明していた。

このように、ある特定のほめが従来の先行研究で前提とされてきたようにほめの受け手に肯定的に評価されるには上述のような種々の条件が満たされた場合だけであり、実際にはコンテキストや社会文化的規範などの社会的要素に加え、ほめ対象やほめの受け手によるほめ手の作為性の評価など、当該のコンテキストの中でどのよう

に相手から評価され、談話を構築しているのかを考慮に入れる必要がある。

2.3 ほめ返答

ほめ表現やそれに対する返答には文化差が大きいことが指摘されているが(Holmes, 1988; Golato, 2005 等), 特にほめ返答における規範意識についてはこれまでに様々な言語文化において研究されてきている。規範に則ったほめ返答をすることにより、返答者は、真意はどうかであれ、「社会的に適切な人間」であることを表明することができるのである。

ほめ返答において常に問題となるのは、ほめを受け入れるべきか否定するべきかという受け手の葛藤である。

「円滑なコミュニケーション」を前提としている Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論では、ほめはポジティブ・ポライトネスであると同時に話し手・聞き手双方のフェイスへの脅威を内包する行為であるとされている。すなわち、ほめ手は「相手を判断・評価する権利がある」と相手から見なされると相手から否定的に評価される可能性があり、ほめの受け手についても、その「ほめ」をそのまま受け取ると自分を高く評価(self-praise)しているというリスクを負うことになるし、逆に否定したとしてもほめてくれた人に反対する状況を生み出してしまう(B&L: 39)というダブルバインドの状態に陥るのである。

西欧では多くの研究において、ほめに対する規範的返答は「ほめを受け入れること」だと結論づけている。例えば Golato(2005)は英語のテキストやエチケット本を調査し、ほめに対する「適切」な返答はほめを受け入れることだと書かれていることを指摘し、Herbert(1990)でも、子どもの世話をする人が、子どもに対し「人からほめられたら『ありがとう』と言わなければならない」と教えている場面が挙げられている。

ほめに関する研究では、しばしば DCT(Discourse Completion Tasks)が用いられてきた。DCTによる量的実証分析は実際のところ、DCTを用いる多くの研究がその結果から結論づける「実際の会話における振る舞い」を表しているとは言えない。しかし、人々の「こうあるべき」と考える規範意識を明らかにするには役立つといえるだろう。Golato(2005)はドイツ語においてほめられた場合の返答は「danke (thank you)」⁴が多く、Chen(2003)の中国語の調査でも、ほめは否定するよりも受け入れる傾向が強いことが報告されている。このことは少なくともこれらの研究の調査対象となった集団において、ほめは受け入れるべきものという規範意識が社会的に共有されていることを反映しているといえる。

一方日本語においては大野(2005)がテレビドラマと映画のシナリオの分析⁵を通し、「回避型応答」、すなわちほめを受けた場合はっきりとした否定や肯定をさける返答を行うことが圧倒的に多いことを明らかにしており、この結果は海外の諸研究とは異なり日本人がほめの受け入れをほめに対する「適切」な対応と見なしているわけではないことを示している。

コンテキストや言語・文化により異なるが、他者からほめられた場合、それにいかに返答するのが「適切」と見なされているかは、社会的規範として人々の間で共有されている。Watts(2003)はこのような、社会的に適切で、守られていて当然だと見なされている、それゆえに他者から有標的に評価されない振る舞いを“*politic behaviour*”と呼び、そこからの逸脱であるイン／ポライトネスの評価の基盤となるものと捉えている。ほめ行為にも当然、適切あるいは許容範囲と捉えられる社会的コンテキストが存在するが、ほめ／ほめ返答はいずれもパフォーマンスの観点から考えると、それを行う際、我々は自分の(言語的)振る舞いが相手にどのような印象を与え、どのように評価されるのかを意識的・無意識的に考えているといえることができる。先行研究から、日本文化では相対的に見て一般的にほめを「受け入れない」ことが社会的に適切と見なされるが、受け入れないことを「いかに表明するか」という非／言語的表現の方法も含め、*politic behaviour* から逸脱することによって何をどのようにパフォーマンスされているかは、その場においてほめの受け手が最も呈示したい自己像であると考えることができる。

3. MのほめパフォーマンスとFの評価

3.1 Mのほめパフォーマンス

男性が女性の容姿をほめる場合、そこではどのような男性の自己呈示が行われているのだろうか。ほめは相手に対する評価の表明である。多くの先行研究が指摘しているように、ほめはしばしば社会的権力の強い者から弱い者に対して行われ、その逆は、ほめているにもかかわらず「失礼な行為」と見なされる。MがFをほめることは、Mが自分にその権利があることを意図的・非意図的に呈示していることになる。Herbert(1989)は、ほめの対象はある社会がどのような対象物に肯定的な評価を置いているかを反映していると述べているが、Mのほめの対象がFの「美しい外見」であることは、「女性の美」を賛美するジェンダー・イデオロギーを基盤としている。Herbert(1989)が、女性から男性への外見ほめは行われなことを指摘していることからわかるように、能力や

人格ではなく容姿を評価されるのはいつも女性である。両者の恋人という人間関係を考えると、MのFに対するほめでは、恋人の女性に対して「女性としての資質」を評価・表明することの許される「支配・所有する男性像」が呈示されているといえるだろう。

これについては談話展開の観点からも同様の指摘ができる。

談話例1は、Fの運転する車内において、MがFに仕事の愚痴をこぼしている場面である。発話番号1〜8までは、抜粋部分以前から15分程度にわたり続いていたMの仕事に関する話題のまま、Fは基本的にMの愚痴を聞き、また同業者として自分の意見を述べるといった立場で参与している。

しかし9MにおいてMはフレームの変更を開始する。一連の相互行為であっても、フレームが異なればその場で呈示する自己像も変わりうる。ここでMは職業人としてのパフォーマンスから、恋人というパフォーマンスにシフトしたといえるだろう。

このような突然のほめフレームへのシフトは、同業者という枠組みでMの悩みを聞き、相談に乗ろうとしていたFを、恋人としての枠組みに強制的に引き戻すものである。ヘテロセクシュアルな恋愛関係においては不可避であるともいえるが、Mの突然のほめフレームの導入は、Fの職業人としてのアイデンティティの呈示を妨げ、「恋人」であり「女性」である立場へとFを暴力的に落とし込む機能を持つ。

問題は、このような男性の権力の自己呈示が「ほめ」を通して行われていることである。ほめは少なくとも言語形式上は相手に対する好意や高い評価を示すものである。これまで述べてきたように、実際にはほめるという行為には相対的な権力関係が現れており、またそれを実践する権力の再生産の場になっている。にもかかわらず、それが「ほめ」という形式をとっている以上、ほめの受け手にとってこれを糾弾するのは困難である。

談話例2では、Mは自己の不適切な振る舞いが顕在的にならないようにするためにほめを行っている。

これはFがMの家に行ったときに行われた会話からの抜粋であるが、Fが訪ねて行ったときMはパソコンで仕事をしており、Mがいるにもかかわらずきりの良いところまで仕事を仕上げようとしていたという。しかし本来自分の家を訪ねてきた他者に対応せず、自分の仕事を優先させることは不適切な行為と見なされる。1M「ちょっと待って、ちょっと待ってな」と依頼を繰り返し「少しの間」であることが強調されているように、MもこのことがFに不快な思いをさせうる行為、またそのため自

分への否定的な評価を招く行為であると見なしていることがわかる。

一方のFは2F「うん、いいよ」のように躊躇を見せず待つことを承諾している。しかしその後1秒程度の沈黙をはさみ、Mは4MでFに対し「かわいい」という評価を行い、Fは即座に5F「かわいくないしそんなんゆわんでいいよ」とそれを否定している。7M「なんで今日もそんなかわいいん」、12M「なんでそんなかわいいんかゆうてみ？」等4M以降のMの発話の繰り返しはFがかわいい理由を尋ねるものであるが、これはFに返答を求める質問ではなく、15F、17FでFが述べているように「間を埋めるため」になされたものであると考えることができる。

その後も24、27、29、31、35、37等においてMはFに自分がかわいい理由を答えさせるよう促す発話を繰り返すが、これらの連続的な発話は、Mが自分の作業を優先し、Fを待たせていることが強調される間を埋めるために行われたものであると見なすことができるだろう。つまり、自分の仕事を続けながらも沈黙を避けて会話を続けることによって、客(あるいは恋人)を放置しているという社会的に不適切な振る舞いをしていることが顕在的になるのを避けようとしているのである。

さらに、Mの用いるほめフレームは習慣的・固定的なものであるため、発話算出にかかる労力が最低限で済む。それが返答しようのない質問形でなされることにより、質問―応答の隣接ペアの期待に基づくFのターンに属する時間を長引かせて、仕事をする時間を稼いでいるといえるのである。

3.2 Fの評価

M自身がどのような自己呈示を行おうとしているのか、またどのような評価を予測していたのかは明らかではないが、Fに対し行なったフォローアップ・インタビューにおいて「このようなMの振る舞いからどのような印象を受けるか」と質問したところ、「女性に『かわいい』と簡単にいう人はチャラチャラした人」だとの回答を得た。本項ではMのほめパフォーマンスに対するFの否定的評価（「Mに『かわいい』と言われても嬉しくない」）がいかに引き起こされているのかを考察する。

3.2.1 ほめの作為性

まず第一に、Fがフォローアップ・インタビューにおいて自ら語っているように、Mのほめを「本心ではない」と感じているところに否定的な評価の第一の要因がある。

筆者(2014)では、Mが「かわいい」というほめを行う際、1. 会話の文脈に関係のないところで挿入される、2. 「でもなー」「だってなー」のように接続詞を有標的

に利用し、語尾を伸ばして間を取りながら発話されることが多い、3. 視線を F に向けている、といったほめフレームを導く文脈化の手がかり(contextualization cues: Gumperz, 1982)が観察されている。9M の場合にも、「でもな——」のように語尾を伸ばした逆説の接続詞が用いられており、これは「かわいい」という「いつもの」ほめが行われる手がかりが示されているものと判断できる。

Goffman(1961)によると、相互行為への「没入」は意識による管理を受けにくい(邦訳 37)とされている。つまり相互行為に「没入」するとその場で行われるパフォーマンスの作為の程度は低くなるとみなすことができるだろう。談話例 1 において仕事上の悩みや愚痴を語っているときの M のパフォーマンスの作為性はそれほど高いわけではない。自分が直面している実際上の困難を同業者である F に対して吐露し、時にアドバイスを与えられたり議論になったりと、自分にとって重要な問題について語り、考えることに「没入」している状態だということができるからである。

一方 9M 以降の一連の M によるほめでは、9M 「でもな——」、12M 「にしてもやで?」、14M 「問題はやで?」等のように習慣的に用いているひとつの定式に則ったほめフレームを導く文脈化の手がかりが用いられている。このような文脈から外れて習慣的に導入される固定的フレームは、これ以前の相談のフレームとは異なり、特定のパフォーマンスを行うことが定式化した作為性の高いものと見なすことができるだろう。

受容者は行為者の発する情報に基づき彼／女の印象や評価を決定するが、ある人の振る舞いは、そのパフォーマンスの作為性が高いと判断されるとその人の「本質」や「真の意図」から隠された「偽りの呈示」であると見なされうる。そして Goffman によると、「そんなうそを一度でもいう気になれる人なら、ふたたび全幅的信頼を彼におくことなどとうていできかねると感ずるのである」(Goffman, 1959; 邦訳 71)。F は、M の「かわいい」という習慣的に行われるほめのフレームにおける M のパフォーマンスが固定的であり、そこに作為性の強さを感じる故に、M のほめをインポライトだと判断するのだといえるだろう。

M のほめフレームにおけるパフォーマンスの作為性の高さは、談話例 2 からも見て取ることができる。

F が 17F で述べているように、F は M がこのほめを「間を埋めるため」に時間稼ぎを目的として行なっていると判断しており、作為的に行われているものと見なしている。別のこと(仕事)をしながら行うことができる産出

コストの低い発話が F に対するほめなのである。さらにこれは M が F を放置して自分の仕事を続けるために行なっているものであり、F を放置することによって顕在的になる自分の不適切な振る舞いを隠蔽しようとするものである。自己の利益のために自分への評価を戦略的に用いようとする M の態度が、F の否定的な評価に結びついたものと考えられる。

3.2.2 恋人という人間関係

恋人間の談話に着目した研究はこれまで少なくとも談話分析の分野においては管見の限り行われていない。唯一、メイナード(2001)の日本の恋愛ドラマにおける言語表現に着目し、恋人(恋愛に発展する過程にある人間関係も含める)たちが様々な表現によって親密化を図ったり感情を伝達したりしている場面を分析しているものがある。この中では「恋ことば」として、「好き」や「愛している」という恋愛感情を伝達する表現がどのように用いられ、どのような効果を及ぼしているかについて言及されているが、「かわいい」などの相手の外見をほめる表現に関する分析は見られない。

一方筆者ら(2013)は、恋愛とは言えないまでも、日本の若者の間で行われる「合コン」において、「ほめ」がどのように展開していくかを分析している。「合コン」は恋愛関係に発展する可能性を潜在的に内包した出会いの場であり、そこでは時間的制約の中で気に入った相手との親密化を図るため、ほめが積極的に用いられていることが観察されている。分析によると、ほめの対象は時間の経過に従って「1. 所属・外見的要素(出身地・見た目・所有物など)」「2. 行動に関する要素(料理を取り分けることなど)」「3. 人格・資質的要素(性格・能力など)」の順に表面的な事象から内面的な事情へと深化する傾向にあり、彼女らはこれを「恋愛への発展に関連する親密化欲求に基づき、それまでの相互行為で得た相手の情報を踏まえたより近接化を志向するほめへと移りかわっている」と分析している。

恋愛関係にあるにもかかわらず、外見のような初対面の相手にとってもほめの対象となりうる事柄に対し、継続的に、また限定的に(「かわいい」という深化のない同一の表現で)ほめを行うことは、文字通り表面的な評価であり、F の人間性、あるいは恋愛における F の代替可能性を意味しない。

また、前述したように F は外見ほめを行う男性について「チャラチャラした」印象を受けると話しており、このような印象は継続的な恋愛関係にある相手から受けるものとして肯定的に捉えられるものではない。しかしそれが「ほめ」であり、恋人への肯定的な評価を表明して

いるという（少なくとも）表面的な形式をとっているため、明示的に相手を非難することも許されていない。

FがMのほめを否定的に評価する背景には、このような恋人という人間関係に要因があると考えられるだろう。

4. Fのほめ否定に見るパフォーマンス

Mとの会話において、また筆者によるフォローアップ・インタビューにおいて、Fは繰り返し「自分をかわいとは思わない」ことを表明している。ここではこのようなFのほめ否定に着目し、なぜそのような自己呈示を行うのかを考察する。

4.1 社会的規範としての自分ほめ回避

自分ほめ(self-praise)は相手よりも自分を高い位置に置く行為であり、一般に避けるべきものとされている。ほめに対する受容的返答は自発的な自分ほめではないにせよ、結局は相手よりも自分を高い位置に置く行為であり、前述したように相手に同意し相手の配慮に応えることとの間でジレンマとなりうる。

4.1.1 ほめ返答の社会的規範

談話例1では19M「Fにゃんがかわいいってことやん」というほめに対してFは返答を行わず、2秒程度の沈黙が起こっている。さらにMが「Fにゃんがあ、かわいいってことがあ、一番の問題やで？」(21M)のように同様のほめを繰り返すと、Fは明確な返答のかわりにため息をつく(22F)。この場合のため息が明確な否定を避けるための「ポライトネス」のストラテジーなのか、あるいは否定返答をするまでもない、繰り返されるくだらないほめに言葉もない、といったより強固なほめ否定であるのかは定かではないが、Mもこのため息を「かわいい」に対する否定と理解していると思われ、「なため息」(23M)、「何のため息」(27M)と笑いながら続く発話を行っている。

Miller et al.(1992)は自分ほめを *bragging* と *positive disclosure* とに区別している。*Bragging* は自分の本質的な気質や他者との比較、あるいは潜在的な能力に対する高評価を表明することであり、エゴ(ego)や虚偽(deceit)とされている。一方の *positive disclosure* は努力による成果、他者に対する感謝などを用いて表現される自分ほめと見なされている。両者はどちらも自分ほめではあるが、*bragging* のほうが他者からより否定的な評価を受けやすいという。Miller et al.の考察は自分ほめを自ら表明する場合のストラテジーに焦点が当てられているのに対し、本稿では他者からのほめに対する返答という違いはあるが、Mの「かわいい」というほめはFの本質的・潜在的な容姿に対するほめ⁶であり、これを受け入れることは *bragging* の危険を犯すことになりかねないといえるだろう。金(2012)も韓国と日本のほめの対象研究におい

て、どちらの言語においても「才能」や「性格」といった本質的特性よりも「行動」や「遂行」といった行為へのほめが多いことを明らかにしている。

しかし同じ東アジア地域でも、日本語母語話者では韓国語母語話者と比較して外見へのほめが非常に少なく、またほめられた場合も肯定の返答はこの調査においてはまったく現れなかったという。このことは、日本語母語話者にとって、外見ほめはほめの受け手に「ほめを否定すること」を強いる社会的制約を課すことになり、「会話者相互に取ってフェイス侵害度が高い」(金, 2012: 196)と見なされるため、避けられているものと考えられるだろう。

このように、特に外見ほめに対しては他のほめよりも受容することが強く制限されており、「かわいい」というほめであるからこそ特に、このような規範意識が談話例中のようなFの強いほめ否定表明につながっていると考えられることができる。

4.1.2 ほめ否定による自己呈示

では、このようなほめ否定・自分ほめ回避を行うことによってFはどのような自己を呈示することができるのだろうか。

社会心理学では自己呈示の方法に関する研究が盛んに行われているが、自分ほめに関連して、斎藤(2006)では自己呈示を自己高揚(self-enhancement)と自己卑下(self-humbleness)という(少なくとも表面上は)正反対の方向性があることが示されている。自己高揚とは自分の長所や賞賛に値する特性を直接的に示す方法であり、自分ほめはこれに相当する。これが成功すると自分が呈示したい自己像を他者から肯定的に評価してもらえという。他方、自己卑下とは自分を他者に対し控えめに呈示する方法で、「その行為が所属している文化の重要な価値観(正直さや謙虚さなど)と結びつくと(中略)他者からの承認や好意をもたらす効果を生むことになる」(斎藤, 2006: 36)。一般に自己高揚的自己呈示は欧米で見られる傾向であるとされているのに対し、自己卑下の傾向は日本人の特徴であることが実証的研究によって明らかにされており(村本・山口, 1997等)、Fがほめを否定する要因に社会・文化的規範が関連するのは確かである。

Goffman(1959: 5)で述べられているように、人は「一般的にいて、伝達することが自分の利益になる印象を与えるように、自分の挙動を操作する」。意図的な印象操作という点に限っていうと、いくつかの自己呈示の方法を選択することができる場合、当然最も自己の利益になると行為者が判断する振る舞いが選択されることになるだろう。Fの場合も自己をより高く評価されるよう呈示

する欲求があると見なすことができるが、F はほめ返答においてほめを否定するという「謙遜」のような自己卑下の形で実現される自己像、つまり社会的に適切な自己像を呈示することが、最も自分にとって利益となるものと見なしているということができる。

4.2 「謙遜」の作為性否定のパフォーマンス

しかし、「謙遜」も「ほめ」と同様、そこに作為性を見出されてしまうと、「自分がかawaiiと思っではいるが、社会的に適切に見せたいから『謙遜』を行っている」と見なされ、やはり望ましい自己像の達成は実現されない。そのため、F はただの「謙遜」ではなく、「自分がかawaiiと本心で思っているわけではない」ことを呈示しなければならないのである。

談話中でのほめ否定に加え、F はまた、フォローアップ・インタビューにおいてもM のほめの作為性の高さを指摘し、否定的な評価を表明しているが、ある特定のほめを「作為的」と推測する要因には、ほめ対象に関する自己認識・自己評価も関連しているものと思われる。つまり、(外見的な美しさに価値があると考えているにもかかわらず)自分は美人ではないと本心から認識している人が他者から美人だと賞賛されると、そこには何かしら別の意図があり、相手は自分の機嫌をとるために自分を操作しようとしているのではないかという疑いが生じうる。F が相手(M およびフォローアップ・インタビューにおいては筆者)に参照させなければならないのはこのような自己像である。F はM のほめの作為性を指摘して自己認識とほめ内容との乖離を主張することにより、自分の謙遜の作為性を否定して提示しているものといえるだろう。

また、相互行為からもこのような「謙遜」の作為性を否定するパフォーマンスが呈示されているのが観察される。

談話例1, 2とも、F はM の「かawaii」というほめに対し比較的強い口調で、また完全に否定を行っている。談話例1では否定を言語化するまでもない、あるいはくだらないほめを繰り返すことへの呆れを表明するためのため息が用いられているし、談話例2においてはM の「かawaiiよ、今日もゆうとくけど」(4M)、「なんで今日もそんなかawaiiん」(7M)に対し、「かわいなしそんなんゆわんでいいよ」(5F)、「なんなんほんまそれ」(8F)と強い口調で否定を行い、怒りの表出とも捉えることができるほどである。

一般に、相手が自分に対し高い評価を行っていることを伝達するほめを「乱暴」な方法で否定することは、相手からの親しさの表明や好意を無碍にすることになり、

インポライトだと評価されうる。このような行為は普通、社会的適切性からの逸脱と見なされ、通常の「円滑な人間関係を構築するコミュニケーション」では意識的に避けるべきとみなされている。つまり、F がほめ否定によって自分ほめを避けるような、社会的に適切な大人としてのパフォーマンスを行うのであれば、このような表明の方法においても意図的にインポライトであることを避けるはずであり、それが可能な人物であると期待されるのである。そのため、F はあえて「乱暴」な表現でほめ否定を行うことによって、自分のパフォーマンスが統制された意図的なものではないことを示すことができる。作為性の高いパフォーマンスであれば、もう少し配慮のある適切な返答の方法があるという期待を裏切ることにより、自分のほめ否定が「社会的に適切な自己」を呈示するための作為的なものではなく、本心から「自分がかawaiiと思っではいるわけではない」というパフォーマンスとなるのである。

4.3 恋人という人間関係

謙遜を呈示することによって得ることのできる自己像は、上で見てきたように、「一般に」、日本文化において望ましい、適切と見なされるものである⁷。

社会言語学の分野では古くから、グループ内の仲間意識(solidarity)を構築・確認するためにあえて社会的規範から外れた言語行動を互いに用いる場合があることが確認されてきた(Labov, 1972 等)。この反対に、社会的規範に従い謙遜を呈示することは、相手との距離を保つことを表明する行為であるといえることができるだろう。Goffman(1959)では「エゴ」という表現が用いられ、詳細な検討は行われていないが、後に自身が提唱することになる(Goffman, 1967)相互行為におけるフェイス⁸の側面から考えると、人が評価されたいと望む社会的自己イメージとしての多面的なフェイスのうち、「壁を取り払った親密な恋人」というフェイスよりも、「適切な大人」という一般的な社会的適切性に関わるフェイスを評価されることを重視したものと捉えることができる。

また、恋愛は、相手が自分に魅了されるよりも自分が相手に魅了されていると、相互関係において相手が優位に立つ可能性があるという側面を鑑みると、一種の権力の駆け引きの場であると見ることができる。M がほめのフレームによって作為的なパフォーマンスを行い、F を翻弄し、操作しようとしているとF が感じているのであれば、F も同様に社会的適切性を優先するパフォーマンスで距離を作って対抗することは、フェイス保持の相互性から考えて妥当である。特に二人の関係性が安定しない恋愛初期の段階ではこのような恋愛の力関係をめぐ

相互行為が繰り広げられやすいと考えられるだろう。

談話例が記録されたのは、友人だった二人の関係が恋愛へと発展してから9ヶ月ほど経った時期である。これが恋愛期間として、また特別な親密さの形成期間として長いのか短いのかは一概にいうことはできないが、このようなほめ否定のパフォーマンスから、Fが二人の関係を未だ発展途上であり、むしろ頑なに「社会的に適切な自己」を呈示する必要がある関係であると見なしていると考えることができる。

5. おわりに

前稿・本稿を通し、Mのほめ/Fのほめ否定の考察を行ってきたが、同種のほめとはいえないまでも、相手を承認するという意味では相手に対する肯定的評価の表明である「好き」というMの発話は、数回記録されているものの以下の談話例に見られるような形で受容され、談話例1, 2で見られたものと同様の文脈化の手がかりが用いられているにもかかわらず一度も否定されていない。

《談話例3》同一ペア

【Mの自宅にて：Mが仕事の内容について話している】

1M: 残り3つを後のほうに入れて

2F: そんなん変じゃない？そんな分け方

3 (2.0)

4M: いや、いっこ、あの一、オリジナルデータをー

5 (1.0)

6M: 残り3つのデータの(****)

7 (3.0)

8M: けどー

9F: ふん

10M: Fにゃん好きやで？

11 (2.0)

12F: ん？

13M: Fにゃんーん

14 (1.0)

15M: 好き

16F: ええ？

17 (2.0)

18M: 溢れるやろたまに

19F: {フフ：笑い}

20M: Fにゃん

21F: んん？

22M: たまにー

23F: んん

24M: あふれるやろ？

25F: んー

草柳(1991)によると、相手から自分に対して呈示されている感情を、「本当ではないもの、自分を欺くために装われた偽りのものではないか」(草柳 1991: 147)という猜疑の感情を抱くことは、恋愛関係に影を落とす。「相手の恋愛感情が偽りのものではないか、と疑い、相手のちょっとした態度にその証拠を読みとろうとし、偽りの理由をあれこれ憶測する」(草柳 1991: 147)。

筆者(2014)では、これまでも見てきたように、FはMが「かわいい」というほめを行う際の特徴的なフレームの文脈化の手がかりの一つに「文脈を無視して突然挿入される」ことを挙げており、これが作為性の高さを伝達するものと見なしている。談話例3のMの「好き」という発話は、ほめと同じ文脈化の手がかりによって伝達されており、従ってFはこれを欺瞞であるとみなすと考えるのが妥当である。それにもかかわらず、「好き」に関しては、「かわいい」に対する返答とは異なり、少し恥ずかしそうな調子で受容とも相槌ともとれる返答を行っているのである。

このことを考えると、究極的にはほめに対する評価で重要なのは、自分が聞きたいと望んでいることを聞けるかどうかという最も基本的で主観的な価値判断であるといえるのかもしれない。

以上、本稿では、ほめが実際の社会的文脈の中でなせ行われたのか、ほめの受け手にどのように評価されているのか、またどのような意味や効果を持つのかを、パフォーマンスの観点から考察してきた。はじめに述べたように、近年、多くのポライトネス研究では談話的アプローチによってその場において実際に何が行われているのかという会話参加者らの認識を問題として聞き手の評価を重視する研究が増えている。相互行為をパフォーマンスの観点から見ることは、社会通念や規範、また特定の相手との関係性を参照しながら相手の行為を評価するという、実際の聞き手の姿を描き出すものであると言えるだろう。

談話研究では現在、グランド・セオリーのような、全てを網羅する「大きな物語」ではなく、実社会を課題とし、実際の相互行為において何が行われているのかを明らかにしていく「小さな物語」の積み重ねが求められているといえる。ほめ/ほめ返答に関しては近年活発な議論が行われていないが、ほめをはじめ、謝罪、依頼、感謝といった、過去に合理主義的枠組みにおいてしばしば取り上げられてきた諸現象についても、新たな枠組みで捉え直す必要がある。

【付記】

本稿の主要な分析を終えたのち、確認事項があり再びFと連絡を取ったところ、彼女らの会話記録期間中、Mは他の女性とも恋愛関係にあり、Fはいわゆる「二股をかけられた」状態であったということが明らかとなった。この事実の発覚により、Mのパフォーマンスによる印象操作は合理的なものだったと判断できるだろう。つまりMは、Fだけに心酔した恋愛状態にあったのではなく、Fからの好意を引きつけながらも他の女性にも好意を抱いているという、心理的に距離のある状態だったのである。筆者は前稿執筆時からこれまで、なぜMは恋人であるFにこのような欺瞞的なほめを繰り返して継続的に行うのか、その本質的な原因に合理的な答えを見つけられず困惑していたが、当時の二人の関係性を今になって知り、深く納得したものである。

前稿・本稿共に、筆者はイン／ポライトネスを聞き手（ほめの受け手）の評価だという立場を取ってきたため、FのMに対する否定的評価に基づき分析を行ってきた。その結果、Mのほめおよびほめパフォーマンスに対しては「欺瞞的」「うそ」等の否定的表現を用いることになったのだが、浮気の事実と照らし合わせて見てみると、Mは逆に態度でうそをつくことのできない、実に「正直」なパフォーマンスであったといえるかもしれない。

分析部分については、この事実が明らかになった後も内容を変えてはいない。F（および筆者）が当時Mの浮気を知らなかったことを鑑みると、この時に下した評価・分析こそがこれらのほめ／ほめ返答にまつわる一連の相互行為の実際であったと考えるべきだからである。

《文字化の規則》

／／：／／の後の発話が次の番号の発話と同時に発せられたことを示す。／(0.5)：()の中の数字は0.5秒刻みで表示される、話の中で起こる沈黙の長さを示す。(0.5)は0.5秒の沈黙であることを示す。／一：「一」の前の音節が長く伸ばされていることを示す。「一」の数が多いほど、長く発せられていることを示す。／?：疑問符ではなく、上昇イントネーションを示す。／、：直前のターンの中で不自然ではない、ごく短い沈黙を示す。／：笑いながらなされた発話の下に記す。／＝：間がなくすぐ起こった発話であることを示す。／ボールド：有標的なアクセントがあることを示す。／{ }：状況を記述する。／***：不明瞭な発話であることを示す。*の数が多いほど長い発話であることを意味する。

参考文献

- 1) 井上博文(1995)「若年層女性における形容詞『かわいい』の意味の記述」『佐賀大学国文』23, 182-202.
- 2) 大野敬代(2005)『『ほめ』のいとと目上への応答について：シナリオ談話における待遇コミュニケーションとしての調査から』『社会言語科学』7(2)
- 3) 金庚芬(2012)『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』東京：ひつじ書房
- 4) 草柳千草(1991)「恋愛と社会組織：親密化の技法と経験」安川一編『ゴフマン世界の再構成』京都：世界思想社。
- 5) 斎藤勇(2006)『日本人の自己呈示の社会心理学的研究：ホンネとタテマエの実証的研究』東京：誠信書房
- 6) 村本由紀子・山口勤(1997)「もう一つの self-serving bias：日本人の帰属における自己卑下集団奉仕傾向の共存とその意味について」『実験社会心理学研究』37, 65-75.
- 7) 泉子・K・メイナード(1991)『恋するふたりの「感情ことば」：ドラマ表現の分析と日本語論』東京：くろしお出版
- 8) 筆者ら(2013)「合コンにおける『ほめ』の分析：ポジティブ・ポライトネスの観点から」
- 9) 筆者(2014)「恋人たちのポライトネス：ほめ意図の推論とイン／ポライトネスの評価」
- 10) Brown, P. and Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 11) Chen, S. E. 2003. *Compliment Response Strategies in Mandarin Chinese: Politeness Phenomenon Revisited*. *Studies in English Literature and Linguistics*, 29(2), 157-184.
- 12) Daikuhara, M. 1986. *A study of compliments from a cross-cultural perspective: Japanese vs. American English*. *Working Papers in Educational Linguistics*, 2(2), 103-134.
- 13) Goffman, E. 1959. *The Presentation of Self in Everyday Life*. New York: Anchor Books. =1974. 石黒毅訳.『行為と演技：日常生活における自己呈示』東京：誠信書房
- 14) ----- . 1961. *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*. =1985. 佐藤毅訳.『出会い：相互行為の社会学』東京：誠信書房.
- 15) ----- . 1967[1982]. *Interaction Ritual: Essays on Face Behavior*. Indiana: Bobbs-Merrill. New

- York: Pantheon Books.=1986. 広瀬英彦・安江孝司訳. 『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学』東京: 法政大学出版局.
- 16) Golato, A. 2003. Studying compliment responses: A comparison of DCTs and recording naturally occurring talk. *Applied Linguistics*, 24(1), 90-121.
- 17) ----- . 2005. Compliments and Compliment Responses: Grammatical structure and sequential organization. Amsterdam: John Benjamins.
- 18) Gumperz, J. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press. =井上逸兵他訳. 2004. 『認知と相互行為の社会言語学』東京: 松柏社.
- 19) Herbert, R. K. 1989. The ethnography of English compliments and compliment responses: a contrastive sketch. In Oleksy, W. (Ed.). *Cognitive Pragmatics*, 3-36. John Amsterdam/Philadelphia: Benjamins Publishing.
- 20) ----- . 1990. Sex-based differences in compliment behaviour. *Language in Society*, 19, 201-224.
- 21) Holmes, J. 1988. Compliments and compliment responses in New Zealand English. *Anthropological Linguistics*, 28 (4), 485-508.
- 22) Jaworski, A. 1995. "This is not an empty compliment!" Polish compliments and the expression of solidarity. *International journal of applied linguistics*, 5(1), 63-94.
- 23) Labov, W. 1972. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 24) Maiz-Arevalo, C. 2012. "Was that a compliment?" implicit compliments in English and Spanish. *Journal of Pragmatics* 44. 980-996.
- 25) Miller, Lynn, Cooke, Linda, Tsang Jennifer, Morgan, Faith. 1992. Should I brag? Nature and impact of positive and boastful self-disclosure for women and men. *Human Communication Research*, 18 (3), 364-399.
- 26) Rees-Miller, J. 2011. Compliments revisited: Contemporary compliments and gender. *Journal of Pragmatics* 43, 2673-2688.
- 27) Watts, R. 2003. *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 28) Wolfson, N. 1983. An empirically based analysis of complimenting in American English. In Wolfson, Nessa. And Judd, Elliot. (Eds.). *Sociolinguistics and Language Acquisition*. Rowley, 82-95. MA: Newbury House.

注

¹ 文字化については稿末「文字化の規則」参照のこと

² 記録には IC レコーダーを用い、計 7 回各 30 分程度自然会話を収集した。両者から事前に会話記録の承諾を得ているが、IC レコーダーはその間女性が管理・記録し、男性はいつ記録が行われているかを知らない。

³ この場合の「評価」とは概念的な意味での認知的・心的評価を指し、実際に談話中に表れた「評価的発話」を指すものではない。認知的に生じた評価をどの程度、またどのように表明する／しないという判断は社会的規範等に基く制約を強く受けると考えられるが、表明されなかったことは評価しなかったことと同義ではない。つまり一見穏やかに進行しているかに見える会話も、実際には双方あるいは一方にとって不快な状態で進行している可能性があり、このような齟齬がその後の相互行為および人間関係に影響を与えないとはいえない。本稿ではフォローアップ・インタビューの問題を認めつつもこれを導入し、会話参加者らの心的評価を可能な限り聞き取ることによって分析の参考としたい。

⁴ Golato は DCT という手法が実際の言語使用を反映していると見なされてきたせいで、これまでの DCT によるほめやほめ返答に関する研究は有効ではないとしている (Golato, 2003)。Golato(2005)では DCT 調査とコーパス調査の結果の比較が行われており、コーパス調査では、DCT で得られた「danke」という返答はほとんど見られなかったことを明らかにしている。

⁵ テレビドラマや映画のシナリオは、具体的な人物や状況がコンテキストの中で描写されているため DCT よりも「現実」の相互行為を反映しているといえるかもしれない。しかしそこで見られる「ほめ」も人々が納得できる形で表象されているといえるため、「現実」よりも「規範」を反映したものと見なすことができる。

⁶ 「かわいい」という表現は、若年層女性を中心として多様な意味を包含するものと考えられている。井上(1995)では、「かわいい」という形容詞は「対象そのものの属性に焦点のある属性形容詞と、表現主体の心理的な内実に焦点がある感情形容詞」(202)の役割を兼備しているとされており、後者の例として愛着を持っていることや、自分に対し好意をもっていることなどを挙げ、「表面的なかわいさよりも内面的なかわいさ」(193)に対しても用いら

れるものと捉えている。従ってこの場合にMの用いている「かわいい」が純粹に「美しい容姿」だけを指しているわけではなく、例えば仕草の愛らしさや感情面での愛着をも含む表現として用いられることがある。しかしMの用いる「かわいい」は、文脈とは関係なく突然、また執拗に繰り返し用いられており、Fが何かしら特別な言動を行なった場合に行われるものではなく、また時に「美人」という表現を「かわいい」と同様の文脈で用いている場合もあるため、この場合の「かわいい」を容姿に対

するものとして行なっていると考えられる。

⁷ 私たちは常にこのような社会的に適切とされる振る舞いを行うという規範の中で生きているため、Fの謙遜の呈示は意図的なものではなく習慣的に身体化された最も産出コストの低い振る舞いであるかもしれない。

⁸ “The term *face* may be defined as the positive social value a person effectively claims for himself by the line other assume he has taken during a particular contact” (Goffman, 1967: 5)